

Title	チョーサーに於けるNatureの問題
Sub Title	"Nature" in Chaucer
Author	安東, 伸介(Ando, Shinsuke)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1963
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.14/15, (1963. 1) ,p.247(100)- 258(89)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	西脇順三郎先生記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00140001-0258">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00140001-0258</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# チョーサーに於ける Nature の問題

安 東 伸 介

## I

中世文学に見られる伝統的な Nature の概念は、近代に於ける概念とは全く異質のものであり、その哲学的・倫理的意義の系譜を全体的に把えることは容易でない。古典文学及び中世ヨーロッパ文学一般に於ける Nature に関しては、既に E. C. Knowlton,<sup>(1)</sup> E. R. Curtius,<sup>(2)</sup> C. S. Lewis,<sup>(3)</sup> 等の優れた研究があり、又、この小論の対象とされるチョーサー文学に於ける Nature については、主として *The Parlement of Foules* に関し、J. A. W. Bennett の極めて詳細な論考がある<sup>(4)</sup>。然しなおチョーサーの自然観については、論ずべき多くの問題が残されているように思う。

本論に於て、筆者は、チョーサーの全作品に見られる Nature 或いは Kynde を分析し、チョーサーの世界に於ける Nature の doctrine ともいうべきものを解明し、それとチョーサーの人間観、或いは倫理観との関連について考察を試みたいと思う。こゝで Nature と言う場合、創造行為或いは創造者としての Nature (*natura naturans*) と、創造されたものとしての Nature (*natura naturata*) という、二つの意義を持つもので

---

(1) E. C. Knowlton; "The Goddess Nature in Early Periods," *JEGP*, XIX(1920), 224 ff.; "Nature in Old French," *MP*, XX(1923), 309 ff.; "Nature in Early Italian," *MLN*, XXXVI(1921), 329 ff.; "Nature in Early German," *JEGP*, XXIV(1925), 409 ff.; "Nature in Middle English," *JEGP*, XX(1921), 186 ff. この中、第二の論文については、当該の *MP* を入手出来ず、披見の機会を得られなかった。

(2) E. R. Curtius; *European Literature and the Latin Middle Ages* (tr. by W. R. Trask), 1952.

(3) C. S. Lewis; *The Allegory of Love*, 1936.

(4) J. A. W. Bennett; *The Parlement of Foules: An Interpretation*, 1957.

あることを附言しておきたい。

中世の自然観（乃至、自然哲学）がギリシアの自然論以来の伝統に基づくものであることは言うまでもない事実であるが、就中、中世の自然観に決定的な関係を持つものは Chalcidius のラテン訳による Plato の *Timaeus* である。チョーサーが *Timaeus* を実際に読んでいたか否か、それは不明であるが、*Timaeus* は、周知のように、Boethius の「哲学の慰め」が深甚な影響を受けた著作であり<sup>(5)</sup>、Boethius の翻譯者たるチョーサーが仮に *Timaeus* を直接に読まなかったとしても、「哲学の慰め」を通じて、Plato の自然論——宇宙形成論を知っていたことは充分に想像される所であろう。中世自然観の発展は、この *Timaeus* に基づく自然論が、次第にキリスト教神学の大系の内に同化して行く過程、言わばギリシア哲学とキリスト教信仰の融合の過程に於て把え得るものである。十二世紀に至って現われた、Bernardus Silvestris の *De Mundi Universitate*、及び Alanus de Insulis の *De Planctu Naturae*、更に Anticlaudianus は、いずれも neo-Platonism の自然論として、中世思想史上重要な地位を占めるのみならず、Nature を一個の Goddess として擬人的に取扱う方法を確立したことから、文学に及ぼしたその影響は極めて甚大なものであった。チョーサーが Bernardus 及び Alanus の著作を読んでいたことは、彼自身の作品から明らかに証明出来ることである。即ち、*The Man of Law's Tale*, ll. 197—203 には、Bernardus の *Megacosmus* の影響が窺われる。Alanus については、*The Parlement of Foules* がそれと直接的な関係を持つことは言うに及ばず、*The House of Fame*, *The Physician's Tale*, *The Canon's Yeoman's Tale* などにも Alanus の著作に依ると思われる言葉が散見されるのである<sup>(6)</sup>。又、Alanus の自然観は *Roman de la Rose* の、特に Jean de Meun の部分に大きな影響を与えているのであるが、チョーサーと *Roman* との密接な関係については、こゝに改めて言うまでもないことであろう。

要約すれば、チョーサーの自然観は、Boethius——勿論それには Plato の思想が内包されている——並びに Bernardus Silvestris, Alanus de Insulis, 及び Jean de Meun という、一連の伝統的系譜の上に立つものであることが実証される。即ちチョーサーは、中世自然観の中心的な流れの中に位置していると言うことが出来るのである。

(5) *De Consolatione Philosophiae*; III, P. ix 及び xii に *Timaeus* への言及が見られる。又、III, M. ix は *Timaeus* 第一部の思想の要約と見られる。

(6) *The House of Fame*, l. 986; *ibid*, l. 272; *The Physician's Tale*. l. 101.; *The Canon's Yeoman's Tale* l. 962.

中世文学に於ける Nature の概念に最大の影響を与えた *De Planctu Naturae* の中で、Goddess Natura に著者 Alanus が捧げた詩の一節に、

O Dei proles, genitrixque rerum,  
Vinculum mundi, stabilisque nexus,  
Gemma terrenis, speculum caducis,  
Lucifer orbis.  
Pax, amor, virtus, regimen, potestas,  
Ordo, lex, finis, via, dux, origo,  
Vita, lux, splendor, species, figura,  
Regula mundi.

とある<sup>(7)</sup>。Plato や Boethius の影響が歴然と看取される詩行であるが、これは、中世（或いはルネサンスに至る迄）の Nature というものに対する観方の本質を、最も端的に表現した例であると思われる。即ち、Nature とは神の創造したもの（*Dei proles*）であり、例えば Ovid に於けるような神と同一のものではない<sup>(8)</sup>。神の子であると同時に、それは又、物を産むもの（*genitrix rerum*）である。神の意志に従い、その意志を実現すべく、神の代理者として——Alanus は又 Natura を *dei vicaria* と呼んでいる——物を産む女神なのである。そして、Nature は世界を確固たる絆によって結合し、法を以て支配する。それは又、愛であり生命力を意味している。神の意志が、その代理者たる Nature によつて形成されたものが、人間存在を含めての自然（*natura naturata*）なのである。チャーサーの自然観も又、根本的には、以上の如き目的論的自然観に属するものであった。

## II

チャーサーの作品中、Nature が擬人的に用いられている例、即ち Goddess Nature の登場する例は極めて多い。Bennett は、チャーサーが、ヨーロッパ文学の伝統に従つ

---

(7) Migne; *Patrologia*, CCX, p.447, A.

(8) "Hanc deus et melior litem natura diremit." Ovid; *Metamorphoses*, Book I, l. 20.

て Nature を擬人化した最初の英詩人であったと指摘している<sup>(9)</sup>。既述のように、これは Boethius, Alanus, 又 Jean de Meun などの伝統に従ったものと思われるが、チョーサーに於けるその代表的な例が見られるのは *The Parlement of Foules* である。この作品は Alanus の *De Planctu Naturae* の影響が最も端的、直接的に見られるもので、

And right as Aleyn, in the Pleynt of Kynde,  
Devyseth Nature of aray and face,  
In swich aray men myghte hire there fynde (ll. 316—318)

に見られる様に、作者自身が Alanus とその著作の名を語っている<sup>(10)</sup>。*Parlement* に於て、‘queen’ (l. 298) と呼ばれ、又、‘empresse’ (l. 319) と呼ばれる Goddess Nature は、先ず第一に、世界の創造者である。

Nature, the vicaire of the almyghty Lord,  
That hot, cold, hevvy, lyght, moyst, and dreye  
Hath knyht by evene noumbres acord. (ll. 379—381)

この様に、Nature を神の代理者 (vicaire) とする考えは Alanus や Jean de Meun と共通のものであるが、*The Physician's Tale* に於ても、その第20行に、“vicaire general” という形で、同様の考えが示されている。Nature は神の代理者として、カオスから秩序ある世界を創り上げたのである。従つて神——これはキリスト教の神でもあり、又、Jupiter である場合もある——は、当然、Nature の上に在る者、Nature そのものを創造する者、として現われる。チョーサーの作品中、神と自然との、この様な関係を示した章句をいくつか挙げて見る。

“O God!” thoughte I, “that madest kynde,” (*The House of Fame*, B. II, l. 584)

(9) J. A. W. Bennett; *op. cit.*, p. 205.

(10) この場合 “Nature” と “Kynde” は全く同義であり、“fynde” と韻をあわせるために “Kynde” が用いられている。この様に 韻や リズムのために 両語を使いわけるといふ原則は、他の場合にも適用され得る。*Parlement* の様に Allegory としての Nature が、一作品中、明確な役割を演ずる場合は、勿論 “Nature” という語に統一されているが、チョーサーの全作品に亘って “Nature” と “Kynde” の現われ方を調べて見ると、この二語が接近して交互に使用されている例が多く、単調な同一語の繰り返しを避けようとする詩人の配慮が窺われるように思う。要するにこの両語の意味領域は、大部分が共通していると見てよいのである。

"But O, thow Jove, O auctour of nature," (*Troilus and Criseyde*, B. III, l. 1016)

"God, maker of Kynde" (*ibid.*, l. 1437)

"God, that auctour is of Kynde" (*ibid.* l. 1765)

Makere……of kynde (*The Second Nun's Prologue*, l. 41)

このように、殆んど表現上の mannerism 或いは cliché といってもよい程の形で現われている。チョーサーの場合、神と自然の関係はこの様に明瞭に把えられているのである。<sup>(11)</sup>

さて、*Parlement* に於ける創造者としての Nature は、前出の引用例からも明らかな様に、或る意味で造物主的な存在であり、その業は宇宙発生論の問題に結びついていると言えるであろう。それに対し、*The Physician's Tale* の冒頭に登場する Goddess Nature は、生物、それも特に「人間」の創造者としての面に力点が置かれて描かれる。

Fair was this mayde in excellent beautee  
Aboven every wight that man may see;  
For Nature hath with sovereyn diligence  
Yformed hire in so greet excellence,  
As though she wolde seyn, "Lo! I, Nature,  
Thus kan I forme and peynte a creature,  
Whan that me list; who kan me countrefete?  
Pigmalion noght, though he ay forge and bete,  
Or grave, or peynte; for I dar wel seyn,  
Apelles, Zanzis, sholde werche in veyn  
Outher to grave, or peynte, or forge, or bete,  
If they presumed me to countrefete.  
For He that is the formere principal  
Hath maked me his vicaire general,  
To forme and peynten erthely creaturis

---

(11) *Complaynt D'Amours*, l. 58 (本稿 pp.249—250の引用参照)を見ると、God と Nature が同列に並べられているが、これにしても、God と Nature を同等のものとする反キリスト教的な思想であるとは、必ずしも断定出来ず、チョーサーに於ける異教的要素を示す例とは考えられない。

Right as me list, and ech thyng in my cure is  
 Under the moone, that may wane and waxe;  
 And for my werk right no thyng wol I axe;  
 My lord and I been ful of on accord.  
 I made hire to the worship of my lord;  
 So do I alle myne othere creatures,  
 What colour that they han, or what figures.”  
 Thus semeth me that Nature wolde seye.

This mayde of age twelve yeer was and tweye,  
 In which that Nature hadde swich delit.

(ll. 7—31)

*Parlement* に於ける記述とともに、これは、チョーサーの作品中、Goddess Nature の像が最も明瞭に、生き生きと描かれた例である。創造者としての Nature の持つ伝統的な姿が、この引用例ひとつによっても、ほぼ完全に把握出来る程のものである。こゝに現われた Nature は、地上の（或いは「月下の」「under the moone」）生物の創造者である。先に引用された *Parlement* の記述に見られる例を除いて、チョーサーの作品に現われる創造者としての Nature は、総て生物、就中、人間の創造者である。そしてその大部分が美しい女性の創造者として登場する。これはチョーサーに於ける Nature のひとつの特徴と言つてよいであろう。

元来、Nature は宇宙発生源に関わる哲学上の論題であつたが、文学に於ては、美の創造者、特に、美しい女性を創り出すものとしての役割が最も重要なものと見做されるに至つたのである。チョーサーに於て、その例は枚挙にいとまがないが、*Virginus* の娘の卓越した美しさを讃えた上記の引用は、その典型的な表現に他ならない。Nature 自らが眺めて歓喜する様な女性、Nature の眼を喜ばせる女性が完璧な美女なのである。

Nature はその様な美女を、神を崇敬するが故に創造したのであつた。*Pigmalion* 等の芸術家達が持つ優れた技 (ars) も、自然の創る美の域に到達することは不可能である。ホラティウスの *Ars Poetica* 以来の、*natura* と *ars* の伝統的な対立関係をこゝにも見ることが出来るのである。

美女礼讃、女性讃美の表現に Nature を登場せしめる以上の如き例は、チョーサーの

作品の随所に見られるものであり、文学上の常套的表現であつたと言ふことが出来る。  
こゝでは、*Anelida and Arcite* の一例を加えるにとどめたい。

Yong was this quene, of twenty yer of elde,  
Of mydel stature, and of such fairenesse,  
That Nature had a joye her to behelde.

(ll. 78—80)

この女性讃美の例に比して稀れではあるが、美しい、立派な男性を讃える場合に、*Nature* が引合いに出されることもある。*Troilus and Criseyde*, B. V, ll. 827 ff. 及び *The Complaynt of Venus*, l. 14 などにもその例が見られる。

*Nature* の創り出す美しい人間は、先にも述べた通り、月下の、即ち地上の存在である。*Troilus and Criseyde*, B I, ll. 99 ff. で描かれる *Criseyde* の天使の如き(“aungelik”)不滅の(“inmortel”)美は、地上的な美を超越した、いわば天上的な美しさであり、“in scornynge of nature” という章句に看取されるように、*Criseyde* は現実の女性でありながら、その美しさは現実のものでない。チョーサーは、*Criseyde* をそれ程美しい女性として描いているのである。又、*The Legend of Good Women*, ll. 240 ff. に於ける、愛の神 *Cupid* の手に導かれた *Queen Alceste* も同様に、地上では決して見ることの出来ぬ、超自然的な美しさを持つている。「*Kynde* の創造した人間の中には、とてもその半分の美しささえ見出せぬ」とチョーサーは書いている。

要するに、チョーサーの作品に於ては、*Nature* の美とは常に世俗の人間の美である。チョーサーが *Nature* という語に於て、所謂、風景としての自然美、近代の概念に於ける自然美について語ると言うことはない。*Nature* は、チョーサーにあっては、殆んど常に、「人間」に対する関心に於て問題にされていると言ひ得るであろう。勿論チョーサーに見られる創造者としての *Nature* が、常に、美しく優れた人間を創る者としてのみ現われるわけではない。然しその多くが、そうした例によって占められていることは、窮極に於て、*Nature* が、美しく、正しく、優れたものを創る者であり、醜く、邪しまなるものは、元来 *Nature* に反するものである、という伝統的な思想に帰着するものであろう。*Bernardus* に於ても、又 *Alanus* に於ても、*Nature* にとつては、完全な、立派な人間を創造することが窮極の仕事であつた。言うまでもなく、姿に於てのみならず、精神に



於ても又欠けた所のない人間の創造を意味している。チャョーサーの描いた *Nature* の美しい作品とは、単に美貌に於てのみ優れた人間ではなく、心情の美しさ、道徳的な美質をも又備えたものなのであつた。

### III

神の代理者たる *Nature* によつて創造された *Nature* (*natura naturata*) は、言わば神の意志の反映であり、神的秩序の現われとして認識される。中世に於ける伝統的な自然観は、*Nature* を神的秩序のシンボルとして把握し、*Nature* の背後に、その第一原因たる神の存在を見る。*Nature* の内には、従つて、常に *Reason* や *Law* が存在するものと考えられていたのである。*Nature* とは、人間がそれに順応すべきものであり、又それに順応することが理法に適つた生き方であつた。第一原因に関わりなく *Nature* を客観的なものとして見、逆に人間に順応させようとする態度、換言すれば、人間が *Nature* を支配しようとする考え方は、明らかに近代の自然観に属している。チャョーサーに於ても、*Nature* とは人間の従うべきものであり、*Nature* に反すること、「自然の法」(*the lawe of Kynde*) に背くことは悪であると見做されていたのである。

チャョーサーに於ける「自然の法」の特質は、例えば、*The Book of the Duchesse*,<sup>(12)</sup> や *Troilus and Criseyde*,<sup>(13)</sup> に窺われる様に、それが現世の愛や熱情の問題と結びついていることである。*Alanus* が *Nature* に語りかけた様々な呼称のひとつに、*'amor'* のあったことが想起されるであろう。チャョーサーの「自然の法」とは「愛の掟」であり、人間の、又生物の本能に根差した愛の情熱である。*Parlement* に於ける *Goddess Nature* は愛を司る女神に他ならなかった。*Nature* は地上の生物、無生物の存続、生殖を企図するものである。*Nature* とは生命であり、死に対立する。再び *Alanus* が *Nature* に

- 
- (12) And in this bok were written fables  
That clerkes had in olde tyme,  
And other poets, put in rime  
To rede, and for to be in minde,  
While men loved the lawe of kinde.

(*The Book of the Duchesse*, ll. 52—56)

'this bok' (l. 52) とは Ovid の *Metamorphoses* であり、その「セイウスとアルスィオーネの恋物語」が後に続いて語られる。

- (13) For ever it was, and evere it shal byfalle,  
That Love is he that alle thing may bynde,  
For may no man fordon the lawe of kynde. (*Troilus and Criseyde*, B. I, ll. 236-9)  
cf. *The Knight's Tale*, ll. 1164—68.

与えた呼称のひとつに 'vita' のあったことが想起される。生に逆らう行為は Nature への反抗であり、人間の肉体が生を保持のために正常な活動を継続することが Nature に従った生き方なのである。深い悲しみのために眠れぬ夜を重ねることは、死に至ることであり、Nature に反する行いであるという意味のことが、*The Book of the Duchess* に於て語られている。<sup>(14)</sup>

Nature の創つた人間とは、元より肉体と共に精神を持つ存在である。肉体に於て、生命の保持に逆らう様な行為、死を早める様な行いが Nature に反するものであるとすれば、精神に於て、人倫の道にもとる行い、道徳に背く振舞いは、これ又 Nature に反するものであった。*The Parson's Tale*, ll. 451—3 は、Nature が人間の肉体と精神に与える賜物について次の様に述べている。

Certes, the goodes of nature stonden outhur in goodes of body or in goodes of soule. / Certes, goodes of body been heele of body, strengthe, delivernesse, beautee, gentrie, franchise. / Goodes of nature of the soule been good wit, sharp under-standynge, subtil engyn, vertu natureel, good memorie.

即ち Nature は、肉体に対しては、健康、力、活動力、美等々を与え、精神に対しては、優れた知能、鋭い理解力、記憶力等々を与える。又、慈悲の心、憐憫の情も Nature の賜物であった。*Complaynt D'Amours* の以下の行、

Sithen she is the fayrest creature  
As to my doom, that ever was livinge,  
The benignest and beste eek that Nature  
Hath wrought or shal, whyl that the world may dure,  
Why that she lefte pite so behinde?

---

(14) And wel ye woot, agaynes kynde  
Hyt were to lyven in thys wyse;  
For nature wolde nat suffyse  
To noon erthly creature  
Nat longe tyme to endure  
Withoute slep and be in sorwe. (*The Book of the Duchess*, ll. 16—21)  
cf. *ibid.*, ll. 465 ff., *The Parson's Tale*, l. 727.

It was, ywis, a greet defaute in Kinde.

Yit is al this no lak to hire, pardee,

But God or Nature sore wolde I blame. (ll. 51—58)

は、たぐい稀れな美女であるにも拘らず、まるで恋する男につれないのは、Nature のとんだしくじりであったという意味のことを語っている。Nature は、これ程に姿形（かたち）の優れた女性を創りながら、その心に慈悲（pite）を入れそこなつたというのである。

Nature はこの様に人間の美質、美德に関係する。中世からルネサンス期に至る伝統的な自然観からすれば、Nature それ自体が道德の規範を示すものであった。<sup>(15)</sup> Nature に従順であることが道德的な生き方だったのである。反道德的行為即ち反自然的行為であるとする、この様な思想を示す例はチョーサーの作品中容易に見出されるものである。

一例を示せば、*The Parson's Tale*, l. 866 に於て、「邪淫」が自然に反する罪として挙げられている——“this (=Lecherie) is deedly synne, and agayns nature.”「邪淫」とは子供を生まぬ男女関係であり、キリスト教に於ける「愛」の最上の形式である結婚と背反する。同じく *The Parson's Tale*, l. 577 に於ても、「邪淫」は反自然的な罪——“unkyndely sinne”として論じられている<sup>(16)</sup>。Nature に反しない「愛」は、勿論 sex と無関係なものではあり得ないが、動物的な sensuality を否定する。「愛」は生殖と無関係でないが、肉慾それ自身を意味しない。Nature に従う「愛」は肉体と精神、エロスと道德のバランスの上に立つものでなければならない。「自然に反する」(“agayns nature”) ということは、道德的な意味を持つていたのであり、この語法が、*The Parson's Tale* や *The Tale of Melibee* の如き説教文学に多く見られることは極めて象徴的なことの様に思われる。

#### IV

以上、チョーサーに於ける Nature のいくつかの問題点を考察して来たが、いずれも

---

(15) cf. J. F. Danby; *Shakespeare's Doctrine of Nature: A Study of "King Lear."* pp. 20—21.

(16) cf. *The Tale of Melibee*, l. 1584 ff.

伝統的な Nature のパタンと矛盾しない。Boethius, Bernardus, Alanus などを中心とする中世的自然観の枠を全くはずれていないのである。言わば Nature の問題に関して、チョーサーという詩人の中世的な思想の骨格を明瞭に読みとることが出来るように思う。Nature 或いは Kynde という語が明白に現われる限り、チョーサーは伝統的な自然観を一步も踏み出してはいない。それではチョーサーは、たゞ単に中世的な思想の枠組の内に留まっていたにすぎないのであろうか。チョーサーの世界は、遂に伝統的な自然観の下に蹶躓していたのであろうか。決してそうではないのである。

Nature とはチョーサーにとつては、ひとつの固定観念である。彼は Nature に関して、伝統的な概念に従つて言及しているにすぎないのである。「愛」の問題が Nature と関係のあることは既述の通りであるが、伝統的な Nature に於ては、エロスと道德のバランスは全きものでなければならず、あくまでも Reason が Sensuality を抑制していなければならぬ。然し、例えば、Jean de Meun の世界に於ける Nature は、そうした旧来の図式を明らかに打破のものであった。彼の関心は Nature のエロスの面にあった。彼は virginity の神聖や、聖職者の独身主義を否定し、言わば “Omnia vincit amor” の思想を強調した詩人である。こうした Jean de Meun の精神は、当然チョーサーに深い影響を与えたものと考えられる。

*The Canterbury Tales* の尼僧院長が腕にはめた念珠の金飾りには、“Amor vincit omnia” という言葉が彫られてあった (*Prologue*, ll. 157—162)。この “Amor” という語に、チョーサーはエロスとしての「愛」の意味を匂わせ、そこにアイロニカルな効果を作り出している。又、彼の *fabliaux* に見られる男女関係は、チョーサーの関心が、単に伝統的な Nature に従う「愛」のみにあったのではないことを、明白に物語るものであろう。更に又、*the Wife of Bath* が、その *Prologue* で語る「愛」の思想も、チョーサーのエロスに対する関心を示すものである。彼女の、「権威」よりも「経験」を重んじる態度には、近代的な Naturalism への傾向が看取される様に思う。

要約すれば、チョーサーが Nature (或いは Kynde) という語を明白に使用する場合は一種の固定観念として、伝統的な概念の枠内に留まるものである。然し、特にそれらの語が用いられぬ所で、チョーサーが深い関心を以て描いた人間像を見ると、我々はそこに、近代的な自然観の萌芽を発見し得る様に思う。Nature に関しても又、チョーサーは中世の結論であると同時に、近代の序論であったと言えるのである。

（附記） 本稿は，昭和37年6月1日，日本英文学会第34回大会（於青山学院大学）に於て発表された研究に，若干の補筆改訂を加えたものである。